

# 脈打つ知を求めて

ファシリテーターとしての学び

富永 良史

## 序. 浮かび上がる原型

毎年、この教師教育研究のために立ち止まり、ふりかえり、思いを巡らせ自分の歩みを物語る。今から、7つ目の物語を語ろうと試みる。

去年は、ある大規模小学校でのPTA会長としての経験を語った。『展開する場の中で』と題された物語。

私の切なる思い、わずかな言葉だけから始まったその1年は、驚嘆の結果が連なる熱気を帯びた記憶として、私の中に残った。

その物語を記すのには例年ほどの時間を要することはなかった。あふれ出る想起と熱気の中に追いかけられるように記した。

語り終えて

自分の中にあった、掴み難い何かをある程度は鎮めて、掴んで落ち着いた言葉の連なりとしての物語に固定できたような感触があった。生々しく暴れる記憶を、冷静な語りの中に封じ込めることができたように感じた。そのつもりだった。

1年が経った今、読み返してもそこに封じ込められた熱気がまるで開封されたかのように噴き出してくる。経験したことを、その直後に語ればどれだけ、冷静を心がけてもそこには、熱気が渦が巻く。

しかし、1年が経ったからこそ

少しばかりの距離と冷静さを持って私の物語を見つめることができる。そして、気づくことがある。

私は昨年、PTA会長としての1年間を語り始めてすぐ、その物語には私の地域における15年におよぶ助走期間がありそれに支えられた1年間だったことに気づいた。結果、私の物語は15年間をふりかえるものとなった。

それが、去年の気づきだった。今この瞬間が、このようにあるのは、見えるのはそれまでの長い助走期間としての経験に支えられているのだと、気づいた。

その気づきの物語を、あらためて読み返し私の語り口、眼差しのあり方に繰り返し現れる原型のようなものがあることが気になり始めた。

これまでも、薄々、気づいてはいた。私がこれまで、教師教育研究のために記してきた物語には、語り口に共通性がある。号を重ねるにしたがってそのことが、浮かび上がってきていた。

私の物事への眼差しには原型がある。それは、こうやって、毎年、自分の歩みを省察し物語ってくる中で形作られてきたように感じる。

意味がひとつに定まらない多彩な経験を一つの物語として語ろうと試みることはその経験の中にある、何かを固定し関係付けていく試みだろう。煮込んだシチューを缶詰にするような感覚。

かつて記した物語を読み返す時  
缶詰を開封し、シチューを味わうような  
感覚になる。

いったん固定化し、封入した缶詰た  
ビーフシチューなど、ラベルを貼られて  
わかりやすい存在としてあるが

開封したそれからは  
多様な意味が、熱気が、想起があふれる。  
固定化し、封入したはずのそれは  
開封されることで、味わうことで  
再び、脈打ち始める。

○

私は、脈打つ知を求める。  
熱気が渦巻き  
多様な何かと関わりの中でこそ語られ  
わかりやすさのために  
分割整理されることを免れ  
いかようにも意味が発掘できるような  
知を求める。

それは  
熱気に満ちた経験のまっただ中で  
得られるものではなく

かといって  
熱気を鎮めて、冷静に語る時に  
得られるものでもなく

経験し、ふりかえり、物語り  
それを読み返し、何かに気づき  
それを次の経験に活かし  
また経験が増え、それをふりかえり、物語り。  
といった、絶えざる営みの中でだけ  
得られるのだと思う。

○

昨年の物語を、読み返し  
その根底にある、何かを発掘しようと試みたい。

それはおそらく  
これまで物語り続けてきた  
ファシリテーターとしての省察の積み重ね  
もしくは、塗り重ねの上にある何かだろう。

ファシリテーターとしての省察の繰り返しは

PTA会長としての実践と省察への眼差しに  
避け難い影響をもたらしていると感じる。

このように省察してこなかったら  
このような景色を見なかったし  
このような判断もしなかった。  
だから、このような結果は残らなかった。

それくらい  
根深い影響をもたらしている。

それはおそらく  
何事においても、同じなのだと思う。  
ここで、こうやって、毎年、省察を重ねながら  
身の回りで生じる、あれこれに対する  
眼差しの向け方を磨いているのだと思う。

この営みをやめない限り  
私の中に、脈打つ知は、あり続けるだろう。  
それについての語り  
どれくらい、他者に共感を持って  
迎え入れられるかは、置くとしても。

この営みを辞めた時  
私の中に、脈打っていた知は  
脈を止め、冷たい缶詰として  
わかりやすいラベルとともに棚に保管されるだろう。

おいしそうなビーフシチューの缶詰だとは  
わかっても、それを煮込んでいた時の思いは  
ラベルの説明書き程度にしか残されない。  
固定化された知として、棚に鎮座するだろう。

私は、そのような知のあり方を求めない。  
だから、この歩みをやめない。

昨年の熱気に満ちた物語を読み返し  
まるで、発掘作業のように  
そこから、脈打つ知を、掘り出したい。  
掘り出したそれを、これまでの長年にわたる  
教師教育研究での語りの中に  
溶かし込み、煮込んでいきたい。

以下、教師教育研究vol.9に寄稿した  
私の小論『展開する場の中で』からの引用を  
随時はさみながら、発掘、または開封が進められる。  
引用はすべて、ゴシック体で表記される。

## 1. 未完成が途上に投げ込まれる

冒頭から述べるのも可笑しいが  
私が語る物語は、いつも「終わらない」。  
どこにも収束せず、どこか途上にあることが  
示されて、幕を降ろす。

**だから、PTA会長としての1年間を語るはずの、この物語は、15年前に遡って、長い軌跡の物語として語り始められる。私に関わってくださったすべての方々への深い感謝を込めて。**

『展開する場の中で』は、このように結ばれている。  
まるで冒頭の語りのように響くが  
これが結びだ。

私は常に、物語の完成を求めながら  
一方で、終末に近づくとつれて  
語り終えることに強い抵抗を覚えてきた。  
完成を求めつつ、未完成に引き寄せられてきた。

自分が経験したあれこれを  
できるだけ深くとらえて、語り尽くそうと願いつつ  
考えれば考えるほど、語れば語るほど  
言葉を費やせば費やすほど  
その不可能性に打ちのめされる。

『展開する場の中で』を記した前の年  
私は、確かに、PTA会長だったし  
そこに記したような、驚嘆の日々を送っていた。  
「驚嘆」は思い入れが強すぎるにしても  
数々の成果を目の当たりにしてきたことは  
間違いない。

しかし、物語を記しながら思うのだ。  
これは、このようにあったのではなく  
このようにも語り得た、に過ぎないのだ、と。

語りは常に未完成であり  
完成したと思ってしまうば  
つまり、起きたことを捉え切ったと思ってしまうば  
そこで、すべては、固定化してしまうのではないか。

固定化した知。定まった知。  
〇〇をして、その結果、〇〇になった。  
だから、〇〇には、〇〇が重要だ。  
のように語り、自己納得する知。  
変わることもない事実として受け止められる知。

形が定まり、固定化したものは扱いやすい。  
しかしそこには、逃避がある。

そのようにも語り得たに過ぎない何かを  
そのようであったと言い切ってしまう  
安易さへの逃避がある。

本当は、経験した何かを語り尽くすには  
語り直し続けるしかないのだ。  
だから、私は、物語を語り終えることから  
逃避してきた。

まるで、冒頭の語り始めのように  
(仮の)「語り終え」を繰り返してきた。

物語の結びに「語り始め」を置くのは  
物語を循環させるためではなく  
新たな語り直しへの可能性を  
他の誰よりも、自分に対して予期させておくため。

常に、途上であることを意識してきた。  
何かが終わるように見えて  
それは、何かの始まりを内在しているし  
大きな流れの途上にすぎないと感じてきた。

だから、小論を記し終えることはあっても  
それは、紙の上に出来事に過ぎず  
私の意識の中では  
仮の語り終えを迎えているに過ぎない。

**この1年間はキセキだったけれど、それは、とんでもない出来事としての奇跡ではなく、あたたかくやわらかいつながりが広がっていく足跡としての軌跡だったということに気づいた。**

歩めば軌跡が残る。  
軌跡は、起きたことの全てを伝えるわけではない。  
軌跡を眺める者が、今どこで何をしていた  
何を感じているのかによって  
その軌跡から読み取るものは異なるだろう。

軌跡は歩んだぶんだけ伸びていく。  
ある時期の軌跡から読み取られる意味は  
あゆみの長さの中で、移ろっていくだろう。

## 2. 今ここに、長くて広い背景が含まれる

起きたことをどのように語るのかは  
その時の私のあり方によるのだろうけれど  
あり方は、その時に決まるのではなく  
それまでの長くて広い背景の上に成り立つ。

自分が立っている、まさに今ここから  
あゆみの軌跡を振り返って  
その意味を読み取ろうとするのだが  
振り返る眼差しには、これまで自分が  
経験し、考えてきたことが色濃く内在している。

今ここにだけいる私は、いない。  
今ここにいる私の眼差しは  
これまでの自分のありようの反映だ。  
これまでのように歩んでこなかったら  
そのような景色は、私の目に映らない。

**ある瞬間に紡ぎ出される自分の言葉や思いは、自分が想像している以上に長くて広い背景、経緯を有しているのだらう。どの瞬間にも、これまでの自分が表出するのだらう。私は今ここにしかないが、今この私の中には、これまでの私が深く含まれている。**

物語が終わらないのと同様  
私自身も終わらない。常に未完成で途上にある。  
そんなことは、当たり前にも思えるが  
自分を〇〇な者であると固定したがる欲求は  
心の奥底で、確かに感じる。

物語を記す時  
自分を確固たる者として定めたい欲求が  
仄見える。

これまでの自分のありようの反映として  
今ここにいる私があるのなら  
これから先の自分のありようの反映として  
未来の「今ここ」にいる私があるのであり  
それは、今ここにいる私とは異なる。

だから、自分は、常に定まらず、移ろう。  
当たり前のことだ。  
なのに、自分を定めたい欲求は根深く感じる。

自分を定めたいという欲求と  
自分が見ている現実を定めたいという欲求は  
おそらく通じている。

定まった自分が見ているこの現実  
確かにこのようにあるはずだ。定まった現実だ、と。

それは、錯覚だ。  
自分が定まらない以上  
自分が見ている現実  
そのようにも見えるに過ぎない。

決して、現実逃避しているわけではない。  
現実の定まらなさに、希望を見出している。

今ここに見えている現実がどのようなものであっても  
そこにはさらに、多様な意味が育っていく余地が  
常にある。だから、今ここを大切に。  
そんな思いで、卒業式の祝辞が生まれた。

子どもたちを前に、「卒業式の日だけでなく、毎日が人生に一度きりの特別な日なんです。だから、2度とはやっ  
てこない今ここを大切に、命を燃やして生きてください。  
あなたの中には成長する力があります。あなたのまわり  
には応援してくれる人たちがいます。だから、大丈夫。  
安心して中学校にいてこい。あなたをずっと応援して  
います」と語った。

3. 持っていないように見えて、持っている  
私は多くの人に語りかける時  
原稿を準備せず、手ぶらでいることを好む。  
準備した語りよりも、その瞬間に生まれた語りを  
大切に。

PTA会長としてのスピーチも  
常に、手ぶらで行ってきた。  
どんなに重要な式典であっても。

手ぶらのスピーチに象徴的に現れているが  
スピーチに限らず、今この瞬間に生まれてくることを  
事前に想定したことよりも大切にしている。

不完全な自分が、これから起きることを  
完全に想定することはできない  
不完全であるがゆえに、不完全な想定に縛られる。  
だったら、精一杯想定した後は  
思い切って、手を離す。  
不完全な想定を放り出し、状況に委ねる。

不完全な自分を受け入れ  
移ろいゆく現実の中に身を投げ出していく時  
自分が現実と溶けあうようになり  
何かが生まれていく。場が展開していく。

「隣の部屋に、合宿通学の食事を世話してくれた団体の  
人たちがいるから、メッセージをもらったらどうか」と  
言われた。しかし、私の手元にはまだ、メッセージを書  
いてもらうカードのひな型がなかった。手ぶらだった。  
すぐに公民館にあるカラーの紙をもらい、カード状にカッ  
トして、それを手に隣の部屋に飛び込んだ。「6年生に

卒業祝いのメッセージを送りたいんです。地域の人たちからたくさんのメッセージを集めたいんです。貼りあわせて、これの何倍もの作品にしたいんです」とお願いした。その場でみんなメッセージを書いてくれた。真剣に考えてくれた。名前もわからない地域の子どもたちに対して、地域の大人たちが真剣に考えてくれている姿に私は、心底、感動した。

私は手ぶらだったけれど  
強くて深い思いを持っていた。  
私は手ぶらだったけれど  
応援してくれる人、助けてくれる人がいた。  
私は手ぶらだったけれど  
見渡せば、何でもあった。  
働きかけ、使い、語ればいいだけだった。

あれこれ持っていないと何かができない  
というのは錯覚だ。  
持つんじゃないくて、開くこと、つながること  
動くこと、語ることで、展開が生まれる。

#### 4. 外へ開くことで力が得られる

目の前にあることに責任があるからこそ  
目の前にない外部とつながることを  
大切にしてきた。

何かを一所懸命に見つめれば見つめるほど  
別の何かを見失っていく。  
自分の眼差しは固くこわばっていく。  
大きな展望が見えなくなっていく。

PTA会長として、組織内部のことは  
気にし出したらきりがなかった。  
だからこそ、広く、やわらかく見つめるために  
外部の空気に触れることが大事だった。

「我が校PTAは1000人の組織で、人口1万人の地区の1割に過ぎませんが、子どもの成長という、地域にとって大切な願いをもとに結びついています。地域を動かすのに、過半数は要りません。はじめの一步は1割もいれば十分ではないでしょうか。PTAのつながりを広げれば、地域を動かす力を持ち得るはずです」という言葉が発せられていた。

そういうことをこれまでも思っていたような気もするが、こんなにはっきり言葉にしたことはなかった。市長、教育長、他校PTA会長という外部に向かって語る場だったからこそ、その場との関係の中でこそ、紡がれた言葉のような気がする。

普段、触れることのない人に  
自分たちの活動を語る時  
そこには、いつもと違う語り口が必要になる。

いつもの語り口は、内部の仲間に向けたものであり  
活動を共にしているからこそ  
通じる語り口になっている。

外部に語りを開く時  
特に、この時は、市長、教育長、他校PTA会長という  
責任ある立場の人の集いだったこともあり  
その場に触発されて  
いつもはぼんやり考えていたことを  
明確な展望として語っていた。

外部に開き  
その場に触発されて  
内部に潜在していたものが  
活性化する。

閉じて背追い込む時  
そのようなことは起きないだろう。

この合宿通学は、PTAにとっても貴重な体験になる。家庭も町内も超えて、地域の子どもたちと直接ふれあう機会であるだけでなく、地域の各種団体の人たちと協働する機会だからだ。PTAが外部とつながって何かをすることで、視界が開ける。子どもを寝かしつけている人、食事を作っている人、一緒に遊んでいる人、そんな人たちの姿を見ると、みんなが子どもの幸せを願う地域の大人同士、仲間同士なんだということを思い出させてくれる。子どもを通じて、地域の大人が心を通わすことができる。

私だけではなく  
仲間と共に外部に開き、つながっていく時  
PTAという小さなコミュニティが  
地域という大きなコミュニティの一部であり  
一員であることを、仲間と共に実感する。

自分が所属するコミュニティの小ささを感じ  
大きなコミュニティの中にいる安心を感じ  
外部の仲間と共に担っている責任を感じる。  
それが、活力を生む。

5. 異例の新参者として、状況に放り込まれる  
どいうい巡りあわせなのか

私のキャリアには、異例の新参者という立ち位置がつきまわっている。

故郷に帰ってきて  
新参者として、地区運動会の100m優勝  
というデビューを果たして以来

陸上チーム監督、町内会計  
体協事務局長、主任児童委員

いずれも、異例の若さでの就任であったし  
高校卒業以来、故郷を離れていた  
地域にとっての新参者としての就任だった。

右も左もわからない状態から  
地域の先輩の力を借りながら  
徐々に目が開いていき  
状況が見えるようになり

そこには  
網の目のように張り巡らされた  
地域のネットワークがあり  
脈々と積み上げられてきた  
様々な行事の歴史があった。

新参者として  
教えられ、目が開いていく道は  
いずれにも共通していた。

これまでの経緯に無知であるがゆえに  
目が開いていく時の驚きの新鮮さは  
深く私の中に響いた。

少年時代を過ごした故郷の背後には  
こんなにも広大で長い背景があったのかと。

そんな背景への視界がまだ狭かった頃  
私の思考は、狭いコミュニティの中に  
終始していたと思う。  
例えば、幼稚園の後援会長を務めていた頃。

**行事や体制を変えることはできないけれど、雰囲気をも  
るく、やわらかく、活気のあるものにしたいと思って、  
幾度も巡ってくる会議や行事の席での会長挨拶を、ざっ  
くばらんな語りかけるような内容にした。語りかける言  
葉の力で場の雰囲気を柔らかくしようと心がけていた。  
隣接する小学校との共催の親睦球技大会でチームとして  
の結束を高めようと試みたり、友愛セール（バザー）の  
売り上げを高めようと鼓舞したりした。いずれも例年以**

**上の成果を収めることができ、場の雰囲気を持つ力を実  
感した。**

大きな達成感を得ていたものの  
今思えば、幼稚園後援会の内部のことだけを  
考え、行動していた。  
大きな地域の中で、幼稚園が置かれている状況  
幼稚園と地域がいかにか結びついているのかへの目線は  
そこには、残念ながら、まだない。

語りをやわらかくして  
コミュニティの雰囲気をやわらかくすること。  
みんなが明るく楽しく参加できるようにすること。

それは、とても大切なことだし  
今、同じ立場になっても、同じことを大切にすると  
思うけれど、もっと余裕を持つてできると思う。  
より外部に目を向けながら、内部に語れると思う。

経験とともに  
現実の背景に目が開けていく  
という実感には、こうやって物語を記すことで  
たどりついているような気がする。

少なくとも、物語ることによって  
目が開いていっているという自覚を得る。  
いつの間にか見えるようになっていく景色の背後に  
少しずつ目が開いていく過程があるのだと  
気づくことができる。

小学校のPTA広報部長と、地域の主任児童委員を  
兼務していた頃には、視界がかなり広がっている。

**私は群を抜いて若輩だった。親世代で、地域活動に熱心  
な人とのつながりがまたしても広がっていった。  
主任児童委員になれば、公民館運営協議会や中学校の地  
域学校協議会の委員も務めることになる。ここで、社会  
教育、学校教育、地域社会の重なり合いの場に自分が立っ  
ていることに気がつくようになった。**

異例の、若輩の、新参者として  
地域の中で歩み続けながら  
新参者であるがゆえに、これまでの地域の流れから  
少しだけ自由だったのだろう。

どの立場でも  
これまでの流れに対して、少々の変化を  
起こすことができた。  
時に大きな変革として結実したこともあった。

新参者が目を開きながら

これまでの流れから少しだけ自由になって  
考え、発信し、人とつながり、行動する時  
変化が生まれやすいのかもしれない。

しかし、私は  
たまたま新参者だったのだろうか。

今にして思うが

誰であれ、常に新参者であるえるのではないか。

長く地域で生きてきたり  
長く特定のコミュニティに属していたりすれば  
これまでの流れに絡め取られやすくなるのは  
間違いないだろう。

しかし、それは、ある種の逃避に近い。  
これまでの流れに従順であれば  
摩擦も苦勞も生じない。  
もちろん、変化も生じない。

これまでの流れに従順であるとは  
これまで、それが為されてきた背景と  
今ここの現実が、かなりの精度で類似していて  
これまでのことを継続するのが  
最も賢明である、との判断に基づくべきものだ。

しかし実際は、今ここの現実と  
これまでの背景の乖離から目を外らせて  
判断を先送りしている時にこそ  
これまでの流れへの従順さが生じるように思う。

今ここに生じている現実  
過去に例がない唯一のものであり  
そこに向き合っている誰もが  
異例の新参者なのではないか。

誰もが常に  
新参者として、新たな現実に向きあい続ける。  
それが、日常のありようではないかと  
思うようになった。

私が、終わらない物語を続けているのは  
自分が、常に新参者として、いかようにも語りうる  
現実と向きあっている感覚がゆえかもしれない。

## 6. 流れに身を任せ、漂う

私は、たいていの場合、現実に対して受け身であり  
静かに眺めていることが多いように思う。

高校卒業までを過ごした故郷に、県外出身の妻とともに  
帰ってきた。同級生とのつながりも希薄になっており、  
ましてや地域とのつながりは皆無に等しかった。どこに  
誰がいるのかわからない。誰がどんな立場にいるのかわ  
からない。そんな状況の中で、変化は、向こうからやっ  
てきた。

なぜか、静かに眺めていられる時間は  
長く許されず、いつも、外から変化がやってくる。  
しかも、想定外の変化がやってくる。

私に変化のきっかけになることはあるが  
その大前提として、私をその立場に置くような変化が  
外からやってくるのだ。

私が好んで、ある立場に立ち  
そこで変化を起こしたことは  
ほとんどないように思う。

ただ、静かに、日常の現実を眺めていたら  
唐突に、外からの誘いに絡め取られ  
ある立場に、新参者として立つことになり  
そこで少しずつ目が開いていき  
考えが生まれ、つながりが広がり、行動が起きた。  
結果として、変化の起点や誘因になっている。  
そんなことが多くある。

**陸上監督として体協との関わりを深めると、次の展開は、  
またしても向こうからやってきた。まるで自然な流れの  
ように体協事務局に名を連ね、地区体育祭の50周年を  
迎える年には、事務局長への就任を要請された。**

流れに身を任せているうちに  
責任が重くなるという展開を繰り返している。

流れを排除しないこと、流れから逃げないことが  
こういう展開を招く要因であるように思う。

私は基本的に  
起きたことを面白がろうとしているので  
何が起きても、そこから立ち去るという判断を  
あまりしない。身の危険がある場合は、別として。

積極的に関わるわけではないのだが  
起きていることを眺め、微細な流れを感じ  
たゆたうように、そこにいることを選ぶ。

自ら何かを選択するというよりも  
自分に向かって流れてくる何かに身をまかせる。

浮き草のようなものだが  
浮き草にだって、生育歴があり、特性がある。  
私という浮き草にも、特性があって  
流れやすい方向というのがあるのだろう。

新参者として帰郷し  
いくつもの役職を担った先に、PTA会長に就任し  
そこからさらに大きく展開していった軌跡は  
私の強い意志が生み出したとは、とても言えない。

私がこの地域の中で結んできた  
多様で広大な関係が、そのような流れを  
生み出してきたのではないかと思う。  
私はただ、逆らわずに、漂っていた。

#### 7. 願い、委ね、想定外を受け入れる

漂い着くようにPTA会長になったが  
そこでは、私は、確かに意志を持っていた。  
幼稚園の後援会長をしていた頃には  
そのような明確な意思はなかった。

意思というより、願いに近い。  
どうしても〇〇するんだ！という意思ではなく  
いろんな力が集まり、現実が動くことを願う。

役員の人みんなに対して  
地区や子ども達の将来に対して  
私は、深い願いを持って臨んでいた。

**体協、幼稚園後援会、主任児童委員など、様々な分野  
で地域の多様な人たちと関わりを深めながら、私の中には、  
広いつながりの中にいるということの安心感が芽生えていた。  
地域のどこに行っても、どんな活動をして、  
声をかけてくれる人や手を差し伸べてくれる人がいると  
いうことが、どれだけ心強いことかを実感していた。だから、  
子どもたちを広くてやわらかくてあたたかいつながりの輪  
の中で守ろうと思った。そういうつながりの輪の中でこそ、  
子どもたちは安全に、安心して成長してくれるはずだから。  
どこに行っても、何をしても、誰かが声をかけ、手を差し  
伸べてくれるような、つながりの輪を創ろうと思った。**

移ろいゆく現実  
漂う新参者として向きあう時に  
願いが生まれるのではないかと思う。

漂うがゆえに浮かぶ願い。

身をまかせるがゆえに生まれる願い。

矛盾しているように響くが  
願いは、変化を前提として生まれるものであり  
固定したもの、定まったものに対しては  
浮かばないのではないか。

自分も現実も移ろいゆくという前提に立つ時  
どのように移ろうかという変化に対して  
願いが生まれる。

移ろいゆく現実の中に漂っていたからこそ  
長い現実の背景から、自然で本質的な  
願いが生まれるのではないか。  
現実離れた夢物語ではなく。

漂ってきたからこそ、生み出される  
現実によりそった本質的な願い。

**「つながりの広がりこそ子どもたちの成長を支える」の  
だから、PTAの究極の目的は「つながりの広がりを生み  
出すこと」だと確信した。その確信を、会長としての方  
針に表現した。平成27年度のPATの方針を「フワッと  
つながって、ギュッと話しあって、ドカン！と実行す  
る」、略して「フワッ、ギュッ、ドカン！」と掲げた。**

方針の不在を  
様々な場所で感じてきた。  
仕事で、地域で、ボランティアで。

方針がないわけではなく  
言葉としてはあるのだが、それを共有する人の  
思考や行動を生み出す機能を果たしていないと  
感じる場面を多く経験してきた。

あらゆる場に  
そこに集う人の思考や行動を喚起する  
中心となる考え方、方向性、問いかけが  
必要だと思い続けてきた。

だから、それを、PTAの場で実行しようと思った。  
会長としての私は、願いとしての方針を  
語ることに徹した。

人の思考や行動を制約するものではなく  
それを喚起し、発展させ、交わりを生み出す  
場の活力源としての方針を語ろうと思った。

**繰り返し語り続けることで、方針と組織図は、私の根源  
的な願いとして深く心に根を下ろすこととなった。「つ**

ながりこそが大切なんです」「僕は円の真ん中にいます、絶対に逃げません。全責任は僕にあります。だから、みなさん、自在に考えて、活動を展開してってください。お願いします」と語った。その語りは、他の誰よりも、私自身のあり方を規定するものとして、1年間にわたって、心に響き続けた。

場に向きあい続けて、決して逃げない。  
目を逸らさない。起きることをすべて受け入れる。  
そうすることで、次なる展開の萌芽を見出せる。

漂うということと、決して逃げないということ。  
ふたつの態度の間に、断層を感じなくもない。  
漂いながら逃げないとは何なのか。

漂う、には、やわらかさが  
逃げない、には、力強さがある。

逃げないから、漂えるのだと思う。  
起きることを受け入れながら  
次の展開の萌芽を見出し  
それに寄り添っていく。

自分の力に頼らない。  
そこに滲み出てくる力と共にある。  
やわらかさと力強さの両立は  
そのようにしてなされる。

**「夏祭りをして、夜は校庭で映画を観る」という企画が運営委員会に持ち込まれた。私は不意を突かれた。想定を超えていた。他地区では例のある企画だとしても、PTAが主催するという話は聞いたことがなかったし、夏は目前に迫っていて、準備期間があまりに短かった。**

方針を語り、あとを委ねれば  
場に力が宿り、動きが起きる。  
その大きさは、時に、想定を超える。  
方針の語り手を、戸惑わせるような動きが起きる。

こんな時に  
漂いつつ逃げない、という覚悟が試される。  
想定を超えた力に寄り添えるかどうか問われる。

想定を越えれば  
恐れが生じ、心身がこわばる。  
想定範囲内に収めたい欲求が高まる。  
そうやって、せっかく生まれた力は  
削ぎ落とされ、箱に詰められ  
無難な形に収まっていくのだろう。

力が生まれやすい状況を創る。  
何かが起きやすい場を創る。  
創る以上は、起きたことを  
受け止める覚悟が必要だろう。

先のことを考えると怖かったけれど、「ドカン！と実行する」という方針を体現すると、肚を決めた。自分には力がないけれど、仲間に期待して委ねて、そこから生まれる力を信じようと思った。

委ねることは、信じること。  
自分では決してできないことでも  
仲間の力が集まれば、きっとできると信じること。

仲間の力を集めるためにこそ  
方針を熟考し、繰り返し語ってきた。  
根底的な思いを共有した場からは  
想定外の力が湧き出す。

年を重ねるにつれて  
そのように思うようになってきた。

20代や30代の頃は  
自分の能力を研ぎ澄まし、自ら実行し  
誰より見事にやり遂げることに関心があったと思う。

やり遂げられたわけではない。  
やり遂げることに関心があったからこそ  
やり遂げられない予感がする時には  
二の足を踏んだ。

そして、貴重な失敗は  
自らやり遂げた時、まわりに幾人もの傍観者を  
発見したことだった。

私は、自分がやり遂げることばかり関心を向け  
そこにいる人たちの力に頼ることをしなかった。  
その人たちは傍観者になっていた。

私は、徐々に、委ねることで生まれる力に  
期待するようになった。

自分ではやり遂げられないことに  
二の足を踏むのではなく  
仲間に委ねることによって  
前進することを覚えていった。

**肚を決めた後、あらためて企画を見つめて思ったのは、  
こういう展開が生まれる組織をこそ、私は創りたかった**

のだということだった。私の想定する中でだけ提案が生まれ、無難に実行される組織ではなく、私に不意打ちをくらわすような提案が出てきて、みんなの勇気を集めて実現に向かっていく組織をこそ創りたかったのだということ思い出した。

場を創れば  
想定を超える力が生まれる。  
場を創る者には  
想定外を受け入れる覚悟がなければならない。

生まれる力は、もしかしたら  
混沌として、猥雑で、多様すぎるだろう。  
それでも、受け入れなければならない。

受け入れ、味わい、温め続ける時  
力の結集が生まれる。

混沌で、猥雑で、多様な力が  
徐々に、一点に集中し始める。  
場が溶けあい、大きな生命体のような感覚が宿る。

今年度のPTAが発足した時に、影も形もなかった企画が、突如として姿を現し、あつという間に膨れ上がり、巨大イベントとして現実になった。信じられない思いだったが、どうやら本当だった。仲間の充実感に満ちた笑顔がそれを保証していた。「フワッとつながって、ギュッと話しあって、ドカン！と実行する」という方針そのままの光景が、私の眼の前にあった。

目指すものが明確に、具体的にあつて  
その実現のために努力し、実現するならば  
思い描いていたものが、形になったに過ぎない。  
想定して、想定通りになった、ということだ。

その努力や達成の価値を否定はしない。  
しかしそこには、生命体としての人間に宿る  
可能性の過小評価がある。

想定して、想定通りにするのは  
機械のプログラムだ。

想定しつつも、状況に身を委ね  
そしたら、想定外のことが起きて  
怖くなるけれど、それでも、それを受け入れて  
味わいながら歩んでいるうちに  
想定外の信じがたい結果に出会う。

そんな歩みを大切にしたい。  
そんな場を創り出していきたい。

8. 実現するには、それなりの背景がある  
幸運に恵まれて実現することも  
あるだろうけれど  
何を実現しようかと思いつくには  
それなりの必然性がある。

自分のこれまでの歩みが  
今ここに対する眼差しを育み  
自分の置かれた状況を理解させる。  
その理解に基づいて、何を実現しようかという  
思いが生まれる。

自分で勝手に思いつくのではなく  
これまでの自分の歩みと  
自分が置かれた状況が  
その時の自分に、実現すべき何かを思いつかせる。

天啓に打たれるようなこともあるが  
それにしても、やはり、意識化されていなかった  
これまでの歩みと、現状のありように  
目が開いた瞬間に、思いが生まれるのだと思う。

私は、以前、体育協会の事務局長をしていて、公民館にいかにも多くの情報と人が集積しているかを知っていたし、公民館長は元体協理事長だったし、この年の社会部長は体協事務局長でもあった。PTAと公民館の間に連携が生まれやすい状況にあった。そこに、たまたま私が壁新聞というタネを委ねたら、あつという間に他地区に例を見ないスタイルの壁新聞教室が生まれ、そこから福井新聞社長賞をはじめとして入賞が続出することとなった。

何かを実現したいと思いつく時  
そこには、必ず、背景がある。  
実現に向けて動きが生まれる時  
そこには、必ず、背景がある。

一人で思いついて  
幸運に恵まれて実現するのではない。

思いつくべくして思いつき  
実現すべくして実現していくのだと思う。

ただし、それは  
後になって、振り返ってわかる。

大切なことは  
思いつくべくして思いつけるように

実現すべくして実現していくように  
我が心身を状況に対して開いて  
起きることを受け入れながら、漂うことだと思う。

**最後の最後に、地域の大人の気持ちのつながりの広さと  
あたたかさを、子どもたちに感じて欲しいという思いが、  
唐突に思い浮かんだ。夜中、白い紙とサインペンを取り  
出し、降って湧いてきたアイデアを書き留めた。地域  
中から卒業をお祝いするメッセージカードを集めて、つ  
なぎ合わせて、巨大な作品にする。卒業式を前に、地域  
の大人たちからの膨大なメッセージに埋め尽くされた壁  
画のような作品が、登校した子どもたちの目の前に突如  
として現れる。そんなイメージが鮮明に浮かんだ。**

今思い返せば  
多くの人の思いのつながりが見えるように  
大きな作品を創るというイメージは  
PTA会長就任前に浮かんでいたのだった。

つながりの広がりを目的としたPTAを  
創ろうと志していた時  
それを具現化するような何かをしたいと  
思っていたのだった。

しかし、方針を語り、委ね  
起きてくる想定外の数々を受け入れているうちに  
このようなイメージは、潜在化していった。

時々、脳裏に像を結びかけることもあったが  
仲間が生み出してくれる成果に  
驚嘆し、感謝している日々が紛れていった。

潜在化した強い思いは  
いつか、きっと、顕在化する。  
それにふさわしいタイミングで  
鮮明なイメージとして顕在化する。

それを実現するにふさわしいタイミングで  
鮮明なイメージが浮かび  
その鮮明さゆえに、行動を止めることができず  
一挙に実現に向けて動き出す。

ふさわしいタイミングであるがゆえに  
多くの力が集まり、実現していく。  
まさに、実現すべくして実現する。

**この企画を通じて地域の大人のつながりをさらに増すこ  
とができると思っていた。校長先生と教頭先生が、思い  
を受け止めてくださった。実現の道が開けた。動きはさ  
らに高速になった。**

こんな幸せな経験をすると  
願えば叶うのだという、都合のいい信念を  
持ってしまうそうだが、そうではないと思っている。

多くの人の奥底に潜在する願いに  
うまくアクセスできた時に  
自分の中に浮かぶ願いこそが  
実現にふさわしい願いとして  
鮮明なイメージを結ぶのだと思う。

地域の子どものために  
大人の思いのつながりを形にして  
見えるようにしたい、という私の願いは  
決して私の独りよがりではなかったはずだし  
私が、突然、思いついたわけでもないはずだ。

地域で育った人間としての私が  
地域の中に自分を開き、漂いながら  
地域に潜在する思いと同期するようになった時に  
浮かび上がったのだと思う。

地域に潜在していた願いが  
私の心身を通じて顕在化した、と言ったら  
神秘的にすぎるだろうか。

自分を地域に開かずに  
自分の能力を頼むことだけに集中していたら  
このような願いは浮かばなかったし  
仮に浮かんだとしても  
協力を得ることはできず、実現しなかつただろう。

**次々に運営委員が会議室にやってきて、和やかに言葉を  
交わしながら、少し高揚した表情でメッセージを貼りあ  
わせていった。700通のメッセージは、あつというまに  
つながり、卒業式場横の廊下に貼り出された。全長15  
m近くの壮大な作品になった。卒業を祝い、これからの  
中学生生活を励ます、膨大な声、声、声。ひとつひとつが  
手書きで、凝った作品から豪快な作品まで多種多様。地  
域の人たちの温もりがにじみ出るような廊下になった。  
廊下の温度が上がった気がした。**

自分を開き  
場に漂い、共鳴すること。  
そこから生まれる力に寄り添うこと。

実現すべきことは  
実現すべくして実現する。  
後になってしか、わからないことだが。

## 9. 大きな物語の一部としての日常

私は私の日常を生きている。  
それをふりかえれば、私の物語が浮かぶ。  
どこまでいっても、語り尽くすことはできず  
未完成で途上の物語を語ることになる。

私の物語には  
多様な人や物や事が登場し  
あれやこれやの展開を生み出している。  
同じように、私も、他の誰かの物語に  
登場しているのだろう。  
もしかしたら、見知らぬ誰かの物語にすら  
登場しているのかもしれない。

世界には  
少なくとも人の数だけ物語がある。  
その人が振り返る数だけ物語は増幅する。

私の物語の外部には  
常に誰かの物語がある。

もう一つ、私にとって大切なことは  
私の物語の外には、すべての人の物語を  
包摂する大きな物語が存在するという感覚だ。

誰の物語であっても  
大きな物語の一部にある。  
世界のありよう、とでも呼ぶべき大きな物語。

私の目から見た大きな物語は  
他の誰かの目から見た大きな物語とは  
おそらく、かなり違う。

今日、見出した大きな物語と  
明日、見出す大きな物語は  
おそらく、少しだけ違う。

大きな物語の中で  
自分の物語がどんな位置を占めるのかも  
日々、移ろっていく。

私は、それらの行事をひとつひとつの単独の行事として  
捉えるのではなく、1年間続く、大きな物語のように捉  
えて、そのような捉え方を、役員の中で共有したいと思っ  
た。行事を積み重ねるにつれて、つながりが細やかに広  
がっていき、あたたかさや柔らかさを増していくよう  
なイメージを共有したかった。

見る人の数だけ大きな物語があるとしても  
ひとつの大きな物語をともに紡いでいるという感覚は  
共有したいと思っている。

ひとつの大きな物語の中にいる感覚が共有できた時  
そこには、人のつながりが力に変わる場が生まれる。

大きな物語の中の多様な登場人物の中の一人として  
違いを認めあう、受け入れあう、楽しみあう。

自分の物語を外に開き  
他者の物語や、大きな物語の流れを受け入れて行く時  
自分の物語に想定外の展開が生まれる。

外部があること  
より大きな何かがあること  
を意識していきたい。

**昨日、ここで起きたこと、やり遂げたことは、すべてが  
映画の中のことのように思い出された。私たちは巨大な  
一本の映画を地域ぐるみで創ったように感じた。しばらく  
して、担当副会長もやってきた。短く言葉を交わした。  
映画の中のセリフを語っているように響いた。**

私たちは、それぞれが  
自分の物語を紡ぎながら  
それが一部をなす、より大きな物語を  
ともに紡いでいる。

その物語の展開は  
誰にもわからない。  
立ち止まり、ふりかえったならば  
その人なりの物語の見え方が開けるに過ぎない。  
同じ物語には見えないだろう。

ひとつの大きな物語を、共に紡いでいながら  
その物語の実相は、振り返る人の数だけ存在する。  
ひとつの中にありながら、そのひとつの実相は  
決して定まらず、移ろい続ける。

無論、自分の物語にしても同様なのだが。

**PTA会長としての役割は終わりに近づいていたけれど、  
この経験も大きな時の流れの中の一コマなのだった。  
私はいつも、途上にあるのだと思った。**

私の物語にしても  
濃密な一年をふりかえれば  
ひとつの物語が浮かぶけれども  
それも、私の人生という大きな物語の中の

一部をなす小さな物語に過ぎない。  
ただの通過点、途上に過ぎない。

私は、これまで、たくさん失敗したし、たまには成功もしたし、窮地に陥ったこともあったし、幸運に恵まれたこともあった。その瞬間、瞬間をとれば、成功と失敗があったけれど、長い時間で見れば、すべて成長の過程だった。いつの間にか、何とかなっている、できるようになっている。「すぐにできないとダメだ」と思うと辛いけれど、「いつかきっとできるようになる」と信じていれば、続けることができる。だから、結果に一喜一憂しない。そう思うようになっていた。

私が為したことが  
成功だったのか、失敗だったのか  
それが、いずれかには定まることはない。

確かなことは、私の物語の  
途上にある出来事ということに過ぎない。

ある時に振り返れば、失敗かもしれない。  
成功に見えて、つまづきの始まりかもしれない。  
失敗に見えて、成功への予兆かもしれない。

いつ振り返るかによって  
どんな状況で振り返るかによって  
その意味は移ろい続けるだろう。

より大きな物語の一部として  
自分の物語を読み解く時  
そこには、成功や失敗に動じない  
おおらかさが宿る。

自分の物語を  
おおらかに受け入れる時  
他者の物語にもおおらかになれるだろう。

その時  
物語と物語は  
開きあい、交わりあい  
より豊かで大きな物語を紡ぎ出すだろう。

## 結. 脈打つ知を求めて

発掘しやすいところから発掘して  
姿を表したのから、土を取り除いてみた。  
ずいぶん、いびつな発掘になったと、振り返る。

掘り出したものに脈絡が  
あったらどうか。

背骨かと思えば  
大腿骨だったり  
小指の爪だったり。

昨年、記した私の物語に  
これまで6年にわたって記してきた私の物語の  
痕跡を見つけつつ、今の私の物語として語った。

過去の物語から何かを発掘することは  
過去の自分の思いを  
私が生きる、今この空気に触れさせて  
少しばかり新しい意味を浮かび上がらせること  
のように感じている。

化石の発掘とは違う。  
昔あったありのままを発掘するのではなく  
かつての思いを現在の空気に触れさせて  
そこに含まれる何かが化学反応を起こして  
かつての思いを変容させるのが  
今回、私が試みたことのように思える。

今、私の目の前には  
発掘した過去の思いが  
断片として、今この空気に触れながら  
じわじわと変容している姿がある。

変容しながら、断片と断片が混じりあい  
新たな関係で結ばれつつあるようにも見える。

発掘し、今この空気と触れさせ  
化学反応が起きるのを待ち  
その様子を、物語に記す。

発掘された過去の思いは  
そうやってまた、地層の中に戻って行く。  
かつてとは、少しばかり姿を変えて  
巨大な地層の中に戻って行く。

いずれまた、私は  
今回、発掘し、また地層に戻した思いを  
発掘し直すことになるだろう。

経験の渦中に学びは生まれる。  
しかしそれは、物語に語らない限り  
我が手にすることはできない。

しかしそれは、物語に語った時

脈打つことをやめる。  
形の定まった、まるで化石のような知になる。  
棚に陳列されたシチューの缶詰のようになる。

物語らなければ手にできないが  
物語ることによって、脈打つことをやめてしまう。  
だから私は、物語を読み返さなければならない。  
読み返すことによって  
かつて経験から得た知に、脈を取り戻させる。

ひとつの物語として定まったかに見えたそれは  
読み返されることによって、今ここの空気と交わり  
新たな物語へと変容する。

その物語を、私は、ここで語った。  
語っている瞬間にだけ  
私の手の中で、その知は脈打っていた。  
その実感は、この手に残っている。

しかし今、残念ながら  
この物語は、幕を降ろす。  
新たな読み返しの機会を待つために  
いったんの幕を降ろす。

化石は地層に戻し  
シチューは棚に戻す。  
少しだけ位置を変えて。

この物語を語ったことで  
何が変わっただろう。

いびつな発掘作業の先に  
何を残せただろう。

語り始めと、語り終わりが  
噛み合わない物語。

始まりの意図と  
終わりの気づきが  
すれ違う物語。

少なくとも  
物語を語り続けること  
読み返し続けること  
語り直し続けることによって  
私の知は、脈打つことを許される  
ということだけは、わかった。

しかし  
わかった、を

定まった知にしてはいけない。

この物語もまた  
移ろい続ける大きな物語の一部へと  
吸収されていく。

(了)

引用

『展開する場の中で』(富永良史,2016)  
教師教育研究vol.9(福井大学教職大学院)